

津山城跡（新国際ホテル建設予定地）発掘調査現地説明会資料

日時 平成29年6月4日 13:30～

津山市教育委員会文化課 文化財保護係

はじめに

津山市教育委員会は、平成29年1月から着手した確認調査（トレンチ調査）を経て、2月から新津山国際ホテル建設事業地の全面発掘調査を実施しています。発掘調査は、ホテルの建物が建築される範囲を調査範囲としています。また、確認調査により複数の遺構面（生活面）が確認されましたが、時期等の検討の結果、2つの時期を全面調査対象としました。

今回ご覧いただくものはその1つで、近世に相当するとみられるものです。

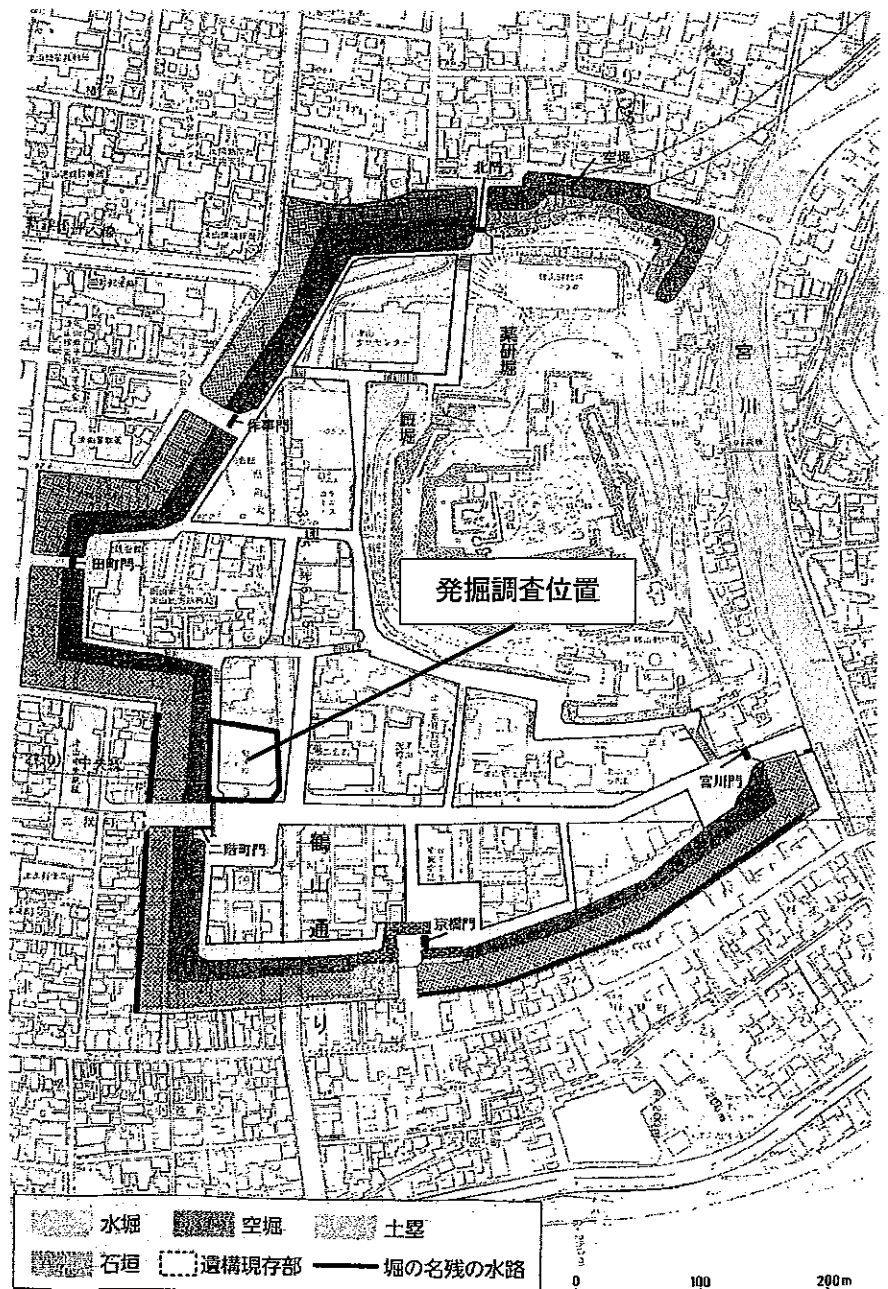
調査位置

今回の発掘調査位置は、津山城にある6つの門のうち、二階町門から城内に入っすぐ左手にあたります。すなわち、津山城のいわゆる「堀の内」にあたる場所で、また津山城の堀に隣接する位置です（第1図参照）。

居住者層としては、城内であることから藩主一門もしくは家臣団の中でも重臣クラスの居住地に該当します。

この区画は、さらに3区画の屋敷地に分かれています。今回の発掘調査区はこの3つのうち、中央のものと南側のものにそれぞれ該当します。

現在残されている絵図等からみると、江戸時代を通じてこの屋敷地の区画は変更されずに使用されたと考えられ、今回説明する位置である中央の区画は、「御蔵」「蔵」「御米蔵」「蔵屋敷」「詰米御蔵」「詰米蔵」と表記されていることから概ね米蔵、そして南側は屋敷地もしくは米蔵として使用されていたといえます（第2図 第3図参照）。

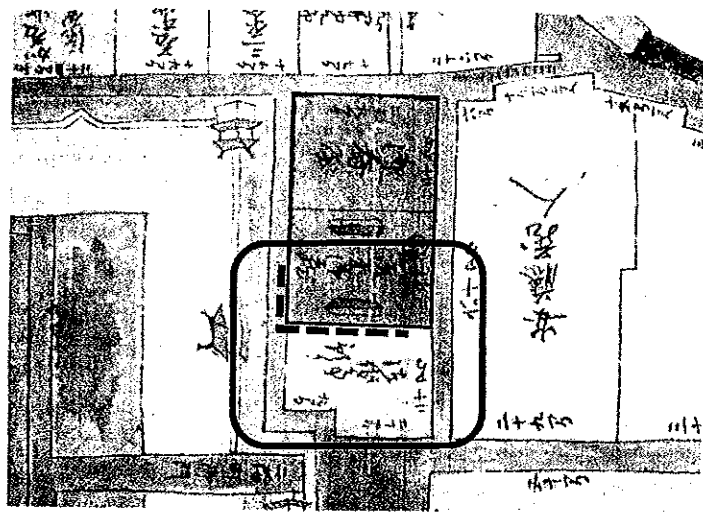


第1図 発掘調査位置図

（「学芸員が作った津山城の本」 33ページ図に加筆）

第2図

「津山城下町絵図」(享保8年)(1723)
に描かれた調査地付近
(「詰米御蔵」「御作事預り」の記載がある。
また、破線は今回検出の石垣と溝が相当
するとみられる位置)



また、これらの区画内の建物は、第3図の右下の図にみられるように、明治初年にはすべて取り壊されたとみられます。今回の調査によって確認された石垣や溝は、各種の絵図と比較しても極めてよく一致しているといえ、さらに層位的な検討から近世城下町に伴う遺構と判断しました。

確認された遺構と出土遺物について

この調査区において現在確認された主な遺構は、石垣、溝、土坑、そして柱穴です。加えて、盛土により土地の造成が行われている状況や、一部では具体的な手法についても確認されました。以下、個々の遺構について述べてゆきます。また、出土遺物については、主に多量の瓦や陶磁器類が出土しています。出土瓦の中には、森氏の時代にさかのぼる可能性のものもありました。

出土遺構とその性格

①石垣

南北方向に指向する石垣で、現状で検出延長約13mを測り、高さは基底部から約0.5mです。現状で見る限り、大ぶりの石の外面を活かして立て置き、裏に栗石ほかの石を入れて調整しています。部分的に天端石とみられる石が残っている個所もあります。

遺構の時期は近世とみられますが、詳細な時期や改修などについてはわかりません。ただし、遺物の出土状況から改修されていることは確実にみられます。石には矢穴が残っているものもありました。

②溝

東西方向に指向する溝です。南北両岸ともに石積みで、東に向かって勾配が下がっています。検出延長は約30m、幅は内幅で約0.4m～0.6mを測り、遺構の時期は近世とみられます。

検出状況からみると、全体的にかなり石が抜かれており、完全に残っているところは多くありません。特に西端から約1/4は顕著です。また、北側と南側では、石の積み方かなりの違いがみられ、一見して南側が粗雑な印象を与えます。南側については、現在確認された石組みのさらに南側に石がみられることから、改修などが行われた可能性が高いと考えられます。さらに、東端では約1.2mの範囲で礫が残っていたことから、礫敷であった可能性を指摘することができます。

なお、溝に伴う塀などの構造物についても確認に努めましたが、その痕跡となるような遺構は確認できませんでした。

③土坑

土坑は、この調査区で4基検出されました。最も大きなものは土坑1で、長径約10m、最大幅約6m、最大の深さ約0.8mを測る不定形な土坑です。埋土には多量の瓦と人頭大以上の礫や大きな石が多量に含まれていました。

土坑2、土坑3は径約2mの円形を呈する土坑で、深さ約0.7mを測るものです。土坑2の埋土からは比較的少量の瓦や礫が、土坑3にはわずかの瓦と拳大の礫がぎっしり入れられていました。また、この二つの埋土には棧瓦が含まれていたことが特筆されます。土坑4は深さ約0.3mの不定形な土坑で、埋土には他の土坑と同じく瓦、礫が含まれていました。

これらの土坑はいずれも不要物を廃棄した廃棄土坑（いわゆるゴミ穴）とみられますが、土坑3については何らかの企図があったのかもしれませんが。

遺構の時期については、現時点でははっきりしていません。

④柱穴、その他

柱穴については、礎石をもつもの、持たないものがあり、多くが埋土に瓦が含まれています。規模からみると、直径0.5m程度のしっかりしたものが多いのですが、検出状況は極めて散発的で、建物等に比定するための検討を行ったものの、まとめることはできませんでした。建物等の礎石についても、礎石と判断されるものは1か所のみで、この調査区における建築物については明らかにすることができませんでした。

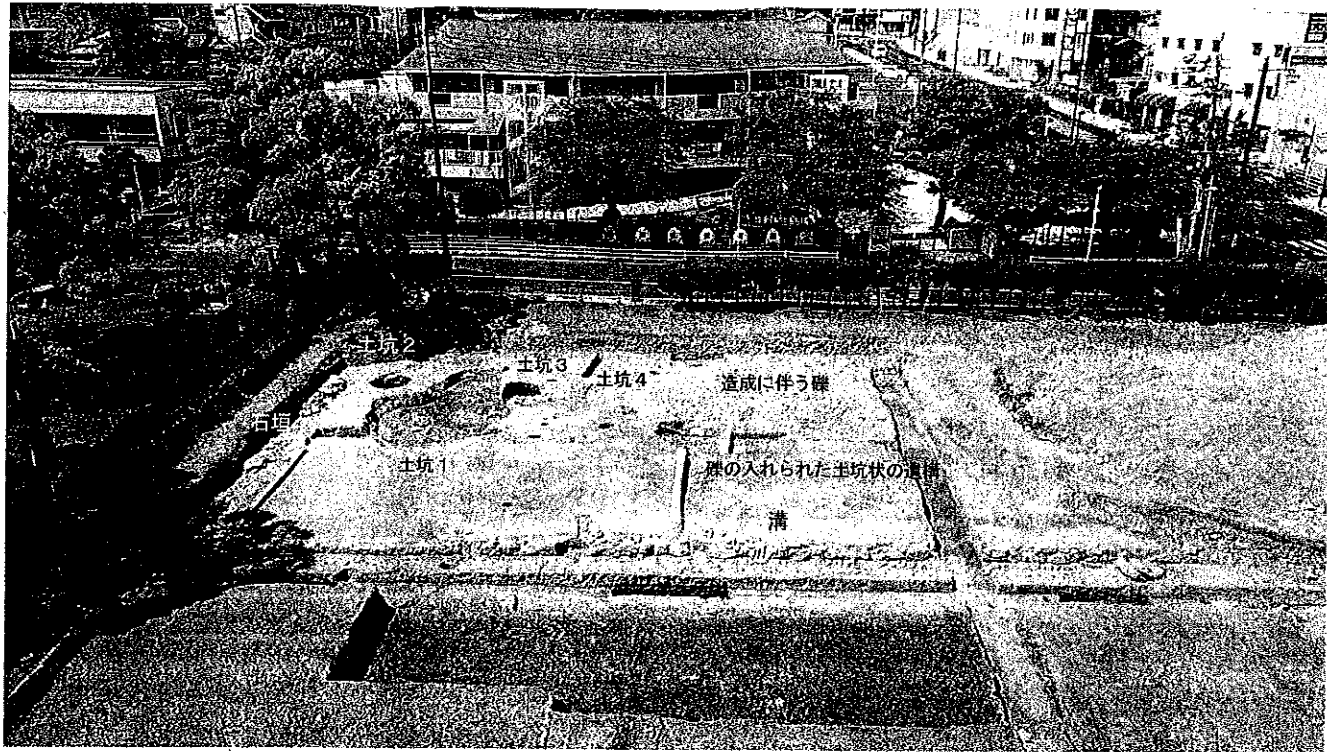
また、トレンチ調査の段階で、現在の土地の高さに至るまでに学校等の建築のためとみられる新しい時期の造成土が確認されました。そして、調査区全域においてこれより以前に大規模に盛土がされ、土地のかさ上げが行われていることが新たに判明しました。この盛土の厚さは最も厚いところで約1mに及びます。盛土が行われた時期としては、近世であることが想定できますが、具体的な時期や追加、改変などの状況は現時点では明らかにできません。盛土の規模や内容等から推測して、森忠政による城下町整備に伴う普請に伴うものである可能性もありますが、判断は現時点ではできません。

調査区の北東部分では、多量の栗石が砂や土とともに造成土中に入れられている状況が確認されました。この付近では基盤層を切る形で人為的に土が入れられ、さらに栗石等が入れられてのち、土地のレベルが調整されているとみられます。何らかの要因で、盛土層を強化するためにこのような手法がとられていたと考えられるものです。さらに、調査区中央付近では、この栗石を含む層に先行する、礫が入れられた土坑状のものが確認されていますが、その性格については不明です。

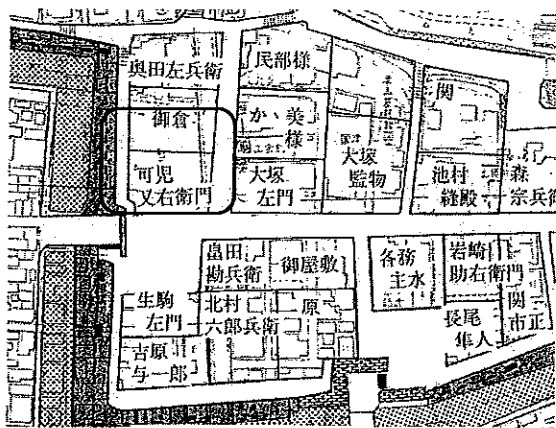
まとめと成果

この調査区においては、近世津山城下町の遺構とみられる溝や石垣が比較的良好に残っていることを確認することができました。また、大規模な土地の造成が行われていることや、その状況についても確認し得る成果が得られました。

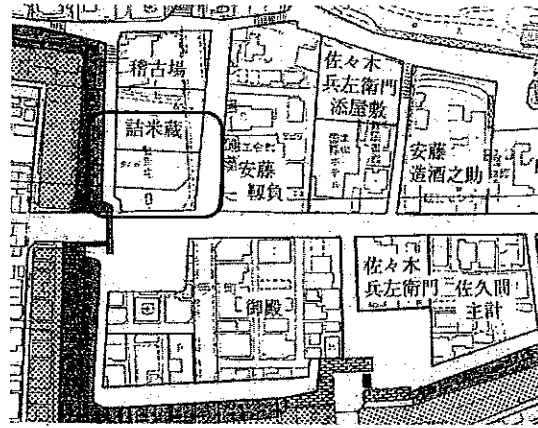
津山城下町の整備過程については未だにわかっていない点が多々ありますが、今回の成果がその解明に向けての一資料になると期待されます。



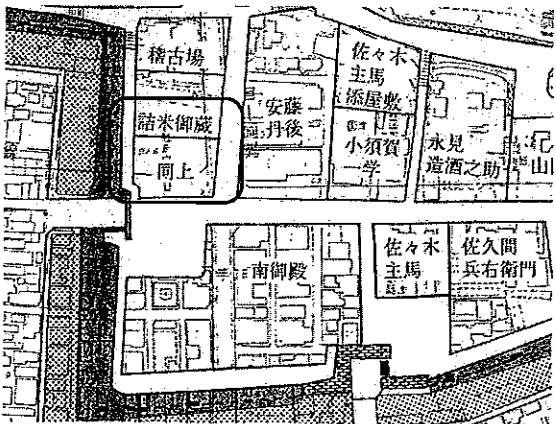
調査区全景（南上空から）



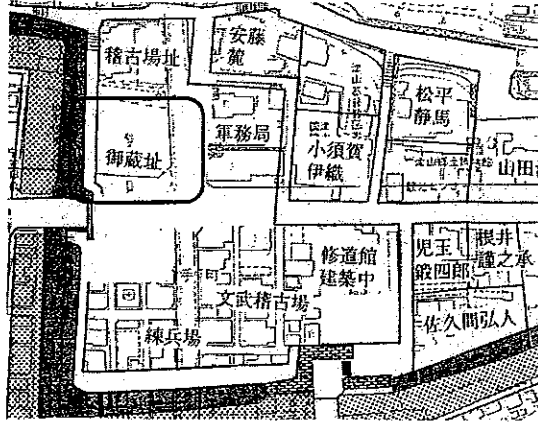
17世紀後半（森家時代）



18世紀中頃（松平家時代）



18世紀末（松平家時代）



明治3年（1870）